國學院大學学術情報リポジトリ

近世農業における三才思想の論考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 三才思想, 線引き問題, 科学性, 近世農業 キーワード (En): 作成者: 饒, 建平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000071

近世農業における三才思想の論考

The discussion of the the Sancai Thought in Japanese modern agriculture

饒　建　平

キーワード：三才思想　線引き問題　科学性　近世農業
Key Words: the Sancai Thought demarcation problem scientific Agriculture in the Edo period

要旨

三才思想は古代中国に起源を持ち、古代中日間の文化交流を通じて日本に伝わり、江戸時代の日本に大きな影響を与えた。科学というと、観察と実験に基づいた現代の自然科学を思い浮かべることが多い。しかし、三才の思想は古代の世界で「科学的な」思想だと見ってもよい。科学と非科学または疑似科学との間の線引きを「どこで」そして「どのようにするのか」という「線引き問題」は19世紀後半に提出された。本研究は、三才思想の科学性に関する研究である。主に「線引き問題」を提起した科学哲学者の「科学」に対する定義から、三才思想が内包する科学の性質を論じる。

Abstract

The Sancai Thought originated from ancient China and was introduced to Japan through cultural exchanges between ancient China and Japan, which had a great influence on Japan during the edo period. When we think of science, we often think of modern natural science based on observation and experimentation. However, it can be said that the Sancai Thought is a “scientific” thought in the ancient world. The demarcation problem of “where” and “how” to draw a line between science and non-science or pseudoscience was presented in the late 19th century. This study is about the scientific nature of the Sancai Thought. It will be discussed mainly from the definition of “science” by the philosopher of science who raised the “demarcation problem”, and the nature of science contained in the Sancai Thought.

はじめに

農学思想とは、人間が農業の実践を通じて、経験や技術的な知識を蓄積した上で形成された理性的な知識であり、古代農学における一般的な原理・原則として具体的に表現されている。古代中国から伝わってきた三才思想もその一つとして近世農学に大きな影響を与えていた。近世農業に関する研究は、大きく二つの分

野に分けられる。一つは農書の整理と研究であり、もう一つは農業科学技術に関する研究である。いずれの分野においても、古代の農業技術の知識を再発掘し、近現代の農業科学で解釈している。その結果、古代人の思想を近現代の科学観や方法論で判断し、古代の農学思想を封建的で迷信的なものと考えてしまうことになる。それだけでなく、古代の農学思想に含まれていた「三才」「五行」「陰陽」などを「伝統的な農業哲学の思想」ととらえる人もいる。(1)

現代には、一般的に科学というと、自然現象や法則を観察・実験・推論によって研究する方法や体系を思い浮かべることがほとんどで、科学の方法としては、観察・実験・仮説・検証などがある。多くの人は、西洋の科学こそが科学の唯一の姿であり、それは「正しい」だけでなく「真理」をも表していると考えている。特に18世紀以降、自然科学はその驚異的な力を誇示し続け、人類社会の発展水準を大きく高めてきた。このような特性から、自然科学への信仰が確立され、自然科学のモデルが人文科学を扱うようになった。自然科学という「門」の下で、ある社会科学は「科学」の列に入り、ある社会科学は「門前払い」にされた。しかし、伝統農業の世界に大きな役に立った「三才思想」は科学的なものなのか、深く考えるべき問題であると思う。

一、「三才思想」とは？

「三才」の思想は古代中国に起源を持つ、中国の伝統的な哲学の宇宙モデルで、天、地、人を宇宙の構成の三大要素と見なす。宇宙観と方法論の一つとして、「三才」の思想は多くの分野で応用されている。しかし李根蟠氏によると、「三才」の理論は主に長期的な農業生産の実践を基礎として形成されたもので、中国の伝統農業の発展を逆に支配し、推進したと指摘している。(2) 三才思想と農業の関係がより明確になった。

三才思想を最初に提唱したのは『易伝』繫辞下であり、「易之爲書也。廣大悉備。有天道焉。有人道焉。有地道焉。兼三材而兩之。故六。六者非它也。三材之道也」である。農学の方面で最も早く三才の思想を提出したのは先秦の『呂氏春秋』

(1) 赵敏．论中国传统农业哲学及其现实意义．船山学刊，2005 (03)。
(2) 李根蟠．从“三才”理论看中国传统农学的特点．华夏文明与传世藏书—中国国际汉学研讨会论文集．中国社会科学出版社，1996。

「審時」篇の「夫稼、為之者人也、生之者地也、養之者天也」であり、この時から、農業生産の「三才」理論は形成されてきた。[3] 後世の農学者の発展を経て、農業の「三才」思想の発展を完成させた。三才思想の理論の発展を見渡すと、「天人関係」について言えば、先秦時期の「天の支配」「天に従順する」から、次第に「天に勝る」までの変化の過程を経験した。[4] また農業生産の過程の中で、次第に「三宜」の原則も形成された。

日本の三才思想の発端は中国であるが、具体的にいつ頃日本に伝わったのかはわかっていない。しかし農書から見ると、日本の最初の農書はすでに豊かな三才思想を持っている。中日間の文化交流により、日本農書の成立は中国農書の影響を受けた。『農業全書』の著者宮崎安貞は中国徐光啓の『農政全書』を参考し、出版されたものとして日本最古の農書の『農業全書』を完成した。『農業全書』の農事総論では、「稼を生ずる物ハ天也。是を養ふものハ地なり。人ハ中にゐて、天の気により、土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ。」[5] と説明して、最初から三才思想の考え方を示した。しかし、中国の三才思想が多くの分野で使われているのに対し、日本の三才思想は主に農学の分野で役割を果たしていたのも見逃せない。

二、倫理実証主義と三才思想

科学哲学の目的の一つは、科学というものの持つ限界を人々に認識させ、科学に関して人々が持っている誤解を解くことである。「線引き問題」は科学の理論と非科学の理論を区別する標準の一つとして、三才の思想の科学性を論証するために分析の方法を提供することができる。線引き問題（英：demarcation problem）とは、科学哲学の世界で使われる言葉で、科学と非科学または疑似科学との間の線引きを「どこで」「どのようにするのか」という問題のことを指す。つまり、科学というものと科学ではないものの間に線を引こうとしたら、様々な線引きの基準が提出された。そして、三才理論では、その線をどこに引くべきか、という問題になる。筆者は、三才の理論は「科学」的なのか「哲学」的なのかという絶対的

(3) 程遥．中国古代三才农学理论新探．学术交流，1991（1）：137-140。
(4) 熊帝兵．中国古代农家文化研究．南京农业大学，2010。
(5) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，46。

な結論を出すのではなく、一般に「迷信」理論とされていて、哲学または形而上学の理論ともされているものより、「科学」に近いのではないかということを論述しようとしている。

（一）論理実証主義とは

19世紀に自然科学の発展にともない、「科学」と呼ばれるものの対象が拡散・発散していき、科学と非科学の「線引き問題」が科学者たちの論点になってきた。この問題を最初に提出するのは20世紀初頭に興隆した論理実証主義の科学者であり、論理経験主義とも呼ばれる。論理実証主義では「意味の基準」を提唱する。意味のある命題、あるいは科学的命題は実証可能な原則を満たさなければならないと考えられている。論理実証主義の代表人物はカール・ヘンペルである。

論理実証主義者は、科学的基準は「経験」であり、経験によって実証された、あるいは反証された命題こそ意味ある命題であり、そうでない命題は無意味な命題だと考える。実証とは、経験することができる事実に基づいた証明と言える。「経験することができる」こと、「観察することができる」ことを意味する。経験に裏づけられるものこそ科学であり、そうでなければ科学ではないのである。論理実証主義の考え方では、科学は日常の観察や実験から大量の経験的データを収集し、それを厳格な手順と方法で整理して、そこから普遍的な自然のルールを見出すという考え方である。

論理実証主義では形而上学的な命題は意味がない。何故ならそのような命題が扱う対象（上帝、陰陽、五行、来世、真理など）は感覚的経験の範囲外であり、人間の感覚的経験によって証明されることも反証されることもできない。彼らは、哲学的、宗教的、形而上学的な要素、また人為的、主観的な要因を排除し、完全に中立的、客観的な観察を通して、経験的データから普遍的な自然の規則を導き出すものだと考えている。つまり、論理実証主義者にとっては、経験的に実証できることが科学的命題なのである。

（二）三才の意味

三才思想の三才は天・地・人を意味する。人間と自然との関係を考えていた昔の人たちは、科学技術が遅れていた時代には知識はあっても、実践や経験の範囲を超えたときには未知の空白に直面し、自然を虚構の物でしか想像できなかった

のである。そのため、最初に「天」という概念があった当時は、「天」は人間を支配する最高の権威を持つ至高の神であり、すべての重大なことは事前に占いで「天」の考えを推し量らなければならなかった。その意味で、「天」は形而上学の「天」であり、上帝、神や真理のような、人間の感覚的経験の範囲外にある対象である。李根蟠氏によると、哲学思想の発展の過程から見れば、「三才」の理論の形成は二つの条件があって、一つは人間を支配する最高神の「天」が「地」と相対する自然の天に転化することで、もう一つは「天」あるいは「神」の前に「人」が立ち上がることである。「三才」の理論を形成する物質的基礎あるいは根本的な力はまさに農業生産の実践である。[(6)] つまり、三才の理論が形成され、発達していくと、三才の「天」は人間を支配する「天」の意味ではなく、簡単に言えば「天の時」「気候」の意味で、つまり気候変動の特性が「天」のもっとも重要な内容と特徴であることを指していたのである。しかし、江戸初期の農書の内容を見ると、農書と農業の発展はまだ始まったばかりで、人々は科学技術の制限を受けて、完全に「天」の人間支配の意味を捨てたわけではなかった。このとき、「天」は「人格神」と「農業気候」の両方の意味を持っていった。宮崎安貞による元禄10年（1697年）の『農業全書』では、「天道にさかふ理りにて、災を招く道なり。」[(7)] と述べて、天に従わないと、天の怒りをかって、結局災いを招くようになるという考え方を示した。そして「地」は土地資源、農業生物の生育と成長の環境条件を指し、「人」は主に農民の生産労働、また支配者の農業政策や措置を指す場合もある。

（三）論理実証主義からみる三才

その意味で、三才の思想は「天」が二つの意味がある、経験的に論証できる部分と、経験的に論証できない形而上学的な部分に分けることができる。また、同じ農書の中にも「天」の解釈が二つ出てくることがよく見られる。『農業全書』では、「人憂れバ天もうれへ、人悦べバ天も悦ぶ。」[(8)] と述べた。昔の農民にとっては、農業に良い天気が「天」がいい気分の意味で、農業に悪い天気が「天」が悪い気分の意味だが、実際に「天」の気分を知ることはできない。

それに対して、三才思想の命題の多くは経験的に証明することができる内容で

(6) 李根蟠．农业实践与“三才”理论的形成．农业考古，1997（01）。
(7) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，110。
(8) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，110。

ある。例えば、『農業全書』では、「又夏至の後九十日、昼夜ひとし。……凡此等の時を以て、田畠を耕せバ、一度にして五度にも当るものなり。」(9) と述べて、畑での耕作は「一度にして五度にも当る」かどうかが経験で証明できる物である。そして「地の利と人の功とハよく調るといへども、天の時に合ざれバ、苦労空しくして益すくなし。」(10) と述べて、この命題に従わなければ、最も直接的な経験は収穫の減少であるので、この命題もまた経験的に直接観察し実証することができる命題である。また小西篤好の『農業余話』では「雨降てはたれ人も待たることなれバ、田へ水のたまるや否かきならし、急ぎ種ることなり。是ハ甚悪し。」(11) と田植えの時期を説明した。梅雨に入るとすぐに田植えしたら結果が悪くなるという経験命題を述べた。直接的に証明される命題ではなく、間接的に証明される命題もある。例えば、児島如水の『農稼業事』では、「茎穂に実のる草は陽なる故に限り有らざれば人力を尽すといへども絶し難し。根に実いる草は陰なれば理に仍て絶せば永くたゆるものなり。」(12) と述べた。ここで「茎穂に実のる草は陽」と「根に実いる草は陰」という雑草の陰陽があるが、雑草の陰陽という命題は、人間の感覚では直接経験することはできないが、雑草がきれいに取り除かれているかどうかは経験的に検証することができ、つまりこの命題では「雑草の陰陽」と「草取り」の間に強い論理的なつながりがあるので、後者は経験的な命題として前者の理論的な命題から導き出される。

そのため、論理実証主義の「線引き」基準から見ると、三才思想の命題は「科学的」な内容もあれば「非科学的」な内容もあるが、命題の数としては実証できる「科学的命題」のほうが多く、相対的に科学の範疇に近いといえる。

三、反証主義と三才思想

（一）反証主義における「線引き問題」

科学と非科学の「線引き問題」について、1920年代に台頭した反証主義の代表的な人物がカール・ポパーで、論理実証主義の実証原則に問題があるとして、反

(9)　山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，54。
(10) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，79。
(11) 山田龍雄等．日本農書全集（第７巻）．農山漁村文化協会，1979，38。
(12) 山田龍雄等．日本農書全集（第７巻）．農山漁村文化協会，1979，249。

証可能性の基準を提唱した。カール・ポパーにとって、まず論理実証主義の実証可能性の基準は、「意味問題」と「線引き問題」という二つの問題を混同している。確かに形而上学は非科学的なものであるが、人間社会の発展において意味がないわけではない。多くの科学理論の源流は、形而上学的な思弁方法や理論的な予想にあることが証明されている。例えば化学の源は錬金術で、医学の源は呪術で、中国の天文学の源も古代の太極、陰陽思想と関わっている。そして科学的命題は、経験だけで完全には証明できないものである。例えば、「すべての白鳥は白い」というような科学的命題は全称命題であるが、「学校の中の白鳥は白い」というように経験が与えてくれるのは単称命題である。何羽の白鳥を見つけても、「すべての白鳥は白い」という命題を証明することはできない。全称命題で単称命題をまとめようとすると困難の境地に陥りようになる。

その故、ポパーは反証主義を主張した。具体的には、ある理論・仮説が科学的であるか否かの基準は反証可能性であること、反証可能性を持つ仮説のみが科学的な仮説であること、かつ、厳しい反証テストを耐え抜いた仮説ほど信頼性（強度）が高いこと、という考え方である。反証可能性とは、その仮説が何らかの観測データによって反証されうることを意味する。反証主義によれば、この可能性を有する仮説のみが科学的な仮説である。例えば、「すべての白鳥は白い」ということを証明することができないが、一羽の黒白鳥が見つかれば、「すべての白鳥は白い」という命題は反証されるわけである。もちろん、反証原則とは、事実上で反証される理論が科学的であるということではなく、論理的に反証されるということである。これに対して、いかなる実験や観測によっても反証される可能性を持たない構造を持つ仮説を反証不可能な仮説と呼び、疑似科学とも呼んでいる。反証主義者にとって、数学、形而上学、宗教理論、フロイトの精神分析学などは疑似科学である。

（二）反証主義からみる三才

反証主義者にとって、科学とは「予想-反論」の動的なプロセスである。人間が創造的な発想で仮説を立て、その仮説は論理的に反証されることができる物である。一旦事実上に反証されるとこの予想は反論されることになる、ということの繰り返しが科学の発展である。

反証主義から見ると、三才思想は反証可能なことである。三才思想の基礎は農

民の農業生産過程での経験であり、人々の実践活働でもある。農民の生産活動が三才思想の判断と合致しなければ、それは命題として反証されてしまう。例えば、『農業全書』では、「凡種芸の事にハ、四季、八節、二十四節を考て其時日にをくれず時分時分に耕し種るを肝要とするなり。」(13) と述べて、季節に合わせて農業活動を行う重要性を説明した。論理的に考えれば、「季節に合わせて作物を育てても作物は育たない」ということが起こる可能性はある。また、他のすべての条件が満たされている状態で、農書に書かれた天候に応じて作物を育てたのに、作物がうまく育たなかったとすれば、この命題は反証されるということになる。

また『農業全書』では、「地の利と人の功とハよく調るといへども、天の時に合ざれバ、苦労空しくして益すくなし。」(14) と述べた。著者は「地」や「人」よりも「天」が農業生産の決め手であるとしていたが、論理的に言えば「天は農業生産の決め手ではない」という言葉も成り立つのではないか。科学技術が発達していなかった時代には、「天が決め手」という言葉も反証しにくく、農民にとってはそれが「科学」だったのである。しかし時代が進み、特に1853年の黒船来航事件以降、近世の科学技術が発展するに伴い、生産活動における「人間」の重要性が認識されるようになった。天保２年（1831）の『砂畠菜伝記』では、「専ら地の利と作人之才覚による事にて、帰する所ハ才覚也。地の利も才覚なしてハ操ふ事叶ひかたし」(15) と述べていて、「才覚」と言われる人事の優位は強調されている。「天が決め手である」という命題が反証されるようになった。反証主義者にとって、まさに科学の進歩のようなことだ。

したがって、三才思想も反証主義者が定義する「科学」の範疇に入る。三才思想は、全体として農業活動についての筋道の立った論理的な「予想」であり、後世にはこの予想に反論する説もあれば、この予想を補完する説もある。

四、歴史主義と三才思想

（一）パラダイムとは

50、60年代になると、科学哲学は論理主義から歴史主義に移っていった。歴

(13) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，79。
(14) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，79。
(15) 山田龍雄等．日本農書全集（第33巻）．農山漁村文化協会，1982，299。

史主義の代表人物であるトーマス・クーンは、一九六二年に『科学革命の構造』という本を出版し、パラダイム（英：paradigm）と通約不可能性（英：incommensurability）という概念を提唱した。パラダイムとは、パラダイムとは、ある専門や学問におけるある科学共同体の共通の考え方であり、その考え方は基本的な方法論を規定し、共通の理論モデルと問題解決の枠組みを提供し、その専門や学問の共通の伝統を形成し、その専門や学問の発展のための基本的な方向を定める。一方、通約不可能性とは、2つのパラダイムの間に、その高低や科学的か否かを合理的に比較するための共通の基盤が見あたらないことを意味する。

クーンは、論理実証主義や反証主義の一元的な考察を批判し、科学史、社会学、心理学などの要素を組み合わせてこそ、科学理論が肯定されると主張した。クーンは科学と非科学を区別する基準はまずパラダイムが存在することで、そしてそのパラダイムに導かれて科学の難問を説明できる（パズル解き）かどうかであると考えていた。新しいパラダイムが確立できれば、その学問が成熟している証拠である。

クーンはパラダイムの唯一の明確な定義を持っておらず、著書『科学革命の構造』では20以上の解釈がなされている。しかし、パラダイムとは、ある科学コミュニティのメンバー全員が尊敬する伝統であると簡単に要約できる。其意味で、パラダイムは知識ではなく、宗教的信念のようなものである。パラダイムは認識論の問題ではなくて、論理実証主義や反証主義が主張する純粋理性の範囲内のことでもない。

（二）パラダイムからみる三才

実は、「三才」以外にも、日本の近世農業には「五行」や「陰陽」などの農学理論が存在する、これらの理論の内容を見ると、「三才」の枠組みが含まれている。たとえば、農書で論述した「季節」や「耕作時節」の部分を「天」の内容とし、「土壌」や「水利」の部分を「地」の内容とし、「人間」は能動的な労働者として存在する。また、小西篤好氏の『農業余話』は陰陽五行をベースに展開されているが、著者にとって、万物、つまり人間も植物も宇宙もすべて陰陽五行によって成り立っているのである。田村安興氏は、特に陰陽の調和に影響するのは耕作の時期・水害

などの災い・虫害や雑草害・施肥である、と指摘した。[16] ここで「耕作の時期」を「天」の内容とし、「水害などの災い・虫害や雑草害・施肥」を「地」の内容とし、「人間」は能動的な労働者として存在する。

ある学者は、三才思想は古代中国の伝統的な農業思想において支配的な地位を占める指導的な思想だと考えている。[17]

三才思想が具体的にいつ日本に伝わったのかは分らないが、『農業全書』は最初に「三才」の観念を明確に農学に取り入れた著作である。『農業全書』の農事総論で「稼を生ずる物ハ天也。是を養うものハ地なり。人ハ中にゐて、天の気により、土地の宜きに順ひ、時を以て耕作をつとむ。」[18] と述べているように、ここでは「天」「地」を前に出して、天地順応の道こそ人の功ありと説いていて、「天地人」の相互補完的な考え方で「稼」を規定している。『農業全書』農事総論の目次から見ると、『時節』は「天」方面の論述と見ることができて、『種子』『土地』『除草』『水利』は「地」方面の論述と見ることができて、そして人はそれぞれの部分の間に存在する。また北陸の十村の土屋又三郎が著した『耕稼春秋』も同様に農業生産における「天」と「地」の重要性を論じ、「天道」こそが成功の第一の要素であるとしていった。[19] 江戸時代後期の農書でも明らかに三才思想が現れている。宝永六年（1709）に成立した『会津農書附録』では「寔に天の道をしり、地の利を知り、人の事を知りて、三才の和、三数の用を明かにして此三の物を実に勤め行て、然而後百穀の成熟を語て上下の神祇に仰願ふと言へし。」[20] と述べて、この本では「天、地、人」を合わせて「三数説」と呼び、三要素の調和が農業生産に及ぼす役割と影響を強調している。また寛政9年（1789）宮永正運が著した『私家農業談』はと同じ三才の角度から農書を述べたが、江戸時代前期の農書と違って、「天地」より「人」の重要性が強調された。[21] 人々は次第に農業生産の時に「天の時」を順応しなければならないだけでなく、地の利に合わせる必要もあることを意識しする。それと同時に積極的に人の主観的な能動性を発揮して、農民は各種の農業技術、道具、措置を通じて一部の不利な要素を克服することができると主張した。

(16) 田村安興．陰陽五行説と日本の農書．高知論叢（社会科学）61，1998。
(17) 盛邦跃．试论《齐民要术》的主要哲学思想．中国农史，2000（03）。
(18) 山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980，46。
(19) 叶磊．试论日本传统农学思想及其现代生态价值．农业考古，2020（06）。
(20) 山田龍雄等．日本農書全集（第19巻）．農山漁村文化協会，1982，361。
(21) 叶磊．试论日本传统农学思想及其现代生态价值．农业考古，2020（06）。

江戸農書の全体を見ると、三才思想の農学における指導的な地位と農書における主流の地位を見ることができるので、クーンのパラダイム理論から見れば、三才思想は近世日本の農業におけるパラダイム思想と言える。

（三）クーンからみる三才思想の科学性

クーンにとって、命題が科学であるかどうかは命題がパラダイムの思想の指導の下で人々が通常科学の段階で出会った難しい問題を解決できるかどうかで決まる。解決できるならばそれは成熟した科学である。逆に非科学的なことである。三才思想は、近現代の農学とは異なる理論が多いものの、古代の農業発展の論理に合致し、伝統的な農業社会で広く受け入れられた農学理論である。クーンの基準から三才思想の科学性を見ると、三才思想は江戸時代の農業者が既知の農業生産活動、未知の農業生産活動を、この同じパラダイムで説明し実践した理論であり、当時の農業生産の問題を確実に解決した。そのため、三才思想はクーンの基準から見ても科学的な理論と考えられる。

五、多元的な考え

様々な「線引き」の出現は、後の科学哲学者たちに、科学は歴史的過程であり、科学の唯一の定義は不可能であることを認識させた。そこで哲学者たちは、科学的における「線引き問題」は存在しないと主張するようになった。いわゆる線引き問題の逝去である。代表的な人物にはポール・ファイヤアーベント、ラリー・ラウダンなどがいる。

ファイヤアーベントは、科学と非科学の間に境界は存在しないと考えており、これまで議論してきた「線引き」の問題は、すべて人間が創り出されたものであると考えられる。彼は、占星術にも神話にも呪術にも「科学になる」機会を与えた。科学の優位性は、政治や制度など、一見科学とは無関係な要素から生まれるとさえ考えられている。科学は政治的に有利になるよう人為的に操作されたイデオロギーなのかもしれない。ファイヤアーベントは自ら中国医学の治療を試み、陰陽五行思想を持つ中国医学も科学であると認めた。彼の考えに従えば、三才の思想は政治とは無関係で、科学的であったのである。

ラリー・ローダンは「線引き問題の逝去」という論文で、科学と疑似科学の間に

線を引くことは不可能だと主張した。したがって、境界線の問題は無効な問題であり、科学の評価はその分野の目標、方法、成果によってなされるべきであって、すべての科学に適用される共通の基準ではないというのである。ラリー・ローダンによれば、科学的線引きの基準は相対的かつ特定的であるべきである。線引き問題が無効な問題である以上、三才思想は近世日本の農学の「科学」の思想と見ることもできる。そして歴史的には、三才思想は現代社会では「科学」とは認められていなく、農学の分野でも指導的地位を失っているが、中医学の分野では依然として大きな役割を果たしている。いずれにしても、三才思想が近世日本の農学において、近代西洋科学のような重要な役割を果たしていたことは明らかである。

おわりに

三才思想は中国古来の伝統的な農業思想として、中日交流を背景に日本の農業にも大きな影響を与え、近世日本の農業を指導する思想となったが、科学技術の進歩と日本の開国とともに、次第に変化が現れた。三才思想の内部では、多肥集約化の展開に伴い、「天＞地＞人」から「人＞天＞地」への変化が現れてきた。しかし、徳永光俊氏によると、江戸時代の後期になると人事の行き過ぎに対して、陰陽の三才論に変わり、国学の影響を受けて「天地自然」「天然」の考え方が誕生するのである。「天然」という言葉は幕末になって、天道・地利・人事の三才を超越するものとして活用されるようになった。(22)

20世紀から科学哲学者の間で「科学とは何か」という議論が盛んに行われてきたが、その過程で様々な視点が生まれ、本論文では様々な哲学者の視点から三才思想の科学性について論述した。これらの哲学者の「線引き問題」についての考えは後発者から反対や批判を受けたが、完璧な理論は存在しないので、三才思想の科学性を多面的に考えることができる。「天」、「陰陽」のような形而上学的な内容を含んでいるので、三才思想が哲学思想であると考えるにもかかわらず、哲学者たちにとって「科学」と呼ばれる部分も存在する。昔は哲学的な意味を考える

(22) 徳永光俊、日本農書にみる自然・農業・地域観―日本農学の原論に向けて―、大阪経大論集・第53巻第2号，2002。

ことが多かったのだが、農学にも科学的な意味があるのではないか。

このように、三才思想は、論理実証主義から見ても反証主義から見ても、あるいは歴史主義から見ても、科学に近い、準科学ひいては科学理論といってもいい。

参考文献

赵敏．论中国传统农业哲学及其现实意义．船山学刊，2005（03）。
李根蟠．从“三才”理论看中国传统农学的特点．华夏文明与传世藏书—中国国际汉学研讨会论文集．中国社会科学出版社，1996。
程遥．中国古代三才农学理论新探．学术交流，1991（1）。
熊帝兵．中国古代农家文化研究．南京农业大学，2010。
山田龍雄等．日本農書全集（第12巻）．農山漁村文化協会，1980。
山田龍雄等．日本農書全集（第７巻）．農山漁村文化協会，1979。
山田龍雄等．日本農書全集（第33巻）．農山漁村文化協会，1982。
李根蟠．农业实践与“三才”理论的形成．农业考古，1997（01）。
田村安興．陰陽五行説と日本の農書．高知論叢（社会科学）61，1998。
盛邦跃．试论《齐民要术》的主要哲学思想．中国农史，2000（03）。
叶磊．试论日本传统农学思想及其现代生态价值．农业考古，2020（06）。
山田龍雄等．日本農書全集（第19巻）．農山漁村文化協会，1982。
徳永光俊．日本農書にみる自然・農業・地域観—日本農学の原論に向けて—．大阪経大論集，53-2。